

アメリカ外交の自画像と国際秩序の将来

◆ 神奈川大学法学部准教授

佐橋 亮

国内課題への対処を優先させるために対外関与を見直すべきだ、いやそれはアメリカのあるべき姿ではない、と大論争が続いている。知識人の多数派は関与見直しに与するが、政治の季節を迎え、威勢の良い発言も増えてきた。中国、ロシアが多くの挑戦を国際秩序に投げかけるなかで、アメリカ外交の漂流は続く。

米

誌『ナショナル・インタレスト』は最新号で、「アメリカの目的とは何か」と題する紙上シンポジウムを特集、元政府高官や著名な外交専門家ら二十五名が意見を寄せている。具体的な質問は次のようなものだ。

「冷戦終結から二十年あまり、アメリカはその優越したパワーに挑戦を受ける、不安定な世界に直面しつつある。アメリカの目的は、どのようなものであるべきか」。

予想通り、というべきだろう。アメリカ外交は世界への関与を見直すべきという声が多くみられる。アメリカ一強時代から変化した新たな勢力均衡を受け入れるべき、国内の経済・社会課題に注力すべき、というのがその理由だ。グラム・アリソン教授（ハーバード大学）は、今は「アメリカ第一」を臆面もなく主張し、国益重視のアプローチを取るべきと書く。

アメリカ外交論においてリアリズムが失われ、極端な意見が横行していると現状を嘆くレスリー・ゲルブ氏（外交問題評議会・元理事長）も、時代認識において大きく変わるものではない。アメリカは引き続きリーダーシップを発揮すべきだが、それはアメリカのパワーの減退、大国間の利害が錯綜する現状を反映したものでなければならず、終わりのない戦争に巻き込まれるものであってはならないと、警鐘を鳴らす。

中国とロシアが多くの挑戦を国際社会に投げかけていることには、すべての論者が自覚的だ。しかし、パワーの優位を確保することがライバルの抑止と同盟国への再保障につながるとする保守的な上院議員や元外交官の強面の主張の一方で、やはり中国やロシアへの慎重論がめだつた。

対テロ戦争に疲れ、軍事予算の増大を渋る国内政治を考えると、マイケル・リンド

氏（新アメリカ財団共同設立者）が提唱するような「コンサート・バランス（協調して対抗する）」アプローチこそ冷戦終結後も維持されてきた覇権戦略に変わるものとして有効という見解も散見される。ポール・ケネディ教授（イェール大学）が語るように、「あなたも全能であるかのような幻想」からアメリカは脱すべきという点で、多くの論者は一致しているように見える。

重要な反論は、ギデオン・ローズ氏（『フォーリン・アフェアーズ』誌編集長）とアンマリー・スローター氏（新アメリカ財団理事長）から与えられている。

ローズ氏は、そもそも質問の前提が誤っており、世界は不安定化していないと断言する。アメリカの目的は、第二次大戦後に形成された自由で開放的な秩序を維持し、さらに拡大していくことにある。中国やロシアは信頼できる同盟国をもってはいるわけ

でも、他国を惹きつけるソフト・パワーにあふれているわけでもない。衰退主義のような悲観論は現実を全くみていない議論だとする。

スローター氏も、自由貿易、人権、そしてルールが支配する国際秩序を擁護するために世界に積極的にかかわることは、アメリカのパワーの行使であるとともに、その源泉であることを自覚すべきだと主張している。

普遍的価値観を推進することでこそアメリカは世界をリードできるとの確信を、これらの発言から読み取れる。しかし特集全体を見回しても、これらの反論は依然として少数派にとどまっている。アメリカの多くの知識人は過去何年ものあいだ衰退主義に浸っており、アメリカ経済の復調、中国の成長鈍化や散見されるようになった国際秩序への異議申し立てといった現象の前にも、「内向き気分」の語り方をなかなか反転させることができていない。

他

方で、現実の国際関係では潮目が変わりつつあるのかもしれない。シリアをめぐる米ロ関係は新たな段階に入ったところだが、ここでは米中関係をみてみよう。九月、ローマ法王訪米の影に霞みながら、習近平総書記は国賓としてアメリカを訪問した。二年前、カリフォルニア・サンフランシスコでの米中首脳会談にみられたような暖かな雰囲気を感じると

ことは難しい。国内外での対中認識が厳しさを増すなかで、アメリカの政治指導者は少なくともポーズとして、今回の習訪米に冷たく当たらざるを得なかった。

南シナ海問題で何ら成果を出すことはなく、国際秩序を形成する柱として米中関係を位置づけようとした新型大国関係を、アメリカが受け入れる機運は完全に失われたかのようにもみえる。

いみじくもスーザン・ライス国家安全保障担当大統領補佐官は、習訪米前にワシントン大学で行った講演において、米中関係は協力と「健全な競争」を併存させていくような関係になるだろうと語り、新型大国関係を容認するかに受け取られた二年前の彼女の発言との差を際立たせた。

また民主党大統領候補レースで先頭を走るヒラリー・クリントン氏は、習訪米期間中に、「中国はフェミニニストを迫害しておきながら国連で女性のための会議を開催している。恥を知れ」とツイートして話題を集めた。人権問題に強い関心を持つクリントン氏ならではの行動であり、北京で開催された世界女性会議で注目を集めてから二十年、依然としてクリントン氏が手強い相手であることを中国に印象づけただろう。政治の季節を迎えるアメリカでは、中国が作り出す挑戦は今後さまざまな形で議論されることになる。選挙にあわせ、威勢の良い議論が勢いを持つことは通例だ。しか

し、それはアメリカの「内向き気分」を選挙後も変えるほどのインパクトをもつのだろうか。少なくとも、選挙キャンペーン中の外交政策論議を額面通りに受け止めることは（衰退主義の言説同様に）避けたいものだ。アメリカ国内の論争は直接、間接に政策、予算に影響するため、注意深く観察を続けていきたい。

国際秩序は、どこにむかうのだろうか。ヘンリー・キッシンジャー氏（元國務長官）は、先の『ナショナル・インタレスト』誌でインタビュに答え、秩序の行く末について興味深い答えをしている。中国は中国中心の秩序作りを目指すのか、それとも既存の秩序に統合されるのかと問われ、キッシンジャーは次のように答えた。

「それこそが挑戦だ。答えがでる問題ではなく、またアメリカ人にとって難しさがある。なぜならわれわれは中国の歴史や文化を理解することが困難だからだ。彼らの基本的な考え方は中国中心というべきものだ。しかしそれは世界全体に大きなインパクトをあたえるものになるだろう。中国の挑戦はソ連よりも微妙な問題を含む。ソ連問題は戦略的なものだった。中国の挑戦はより文化的なものだ。果たして、同じように思考することの出来ない二つの文明は、国際秩序において共存という解を導き出すことができるのだろうか。」